

もくげき
黙劇シリーズ考

佐々木正芳

暑い。今年も冷夏かと思っていたら7月に入って急に暑くなった。夏だ、また8月15日の敗戦の日がやって来る……。

こんな書き出しで始めたのは、私の仕事が突き詰めればそこに密接に関わっているからだ。その時私は中学2年、教科書に墨を塗りながら戦後民主主義を噛みしめた世代である。それまで信じ込まされて来たものはすべてウソだった、という事を知る過程が物心つく過程であった。

一八〇度の思考の転換など言葉では容易だが、当人の内部の混乱は大変なものだ。体制や時流への不信と共に、“もう騙されないぞ”と何事につけ斜に身構える精神の姿勢が身についたとしても致し方ない。

以来、何がホントか一つ一つ確かめながら立て直して来る訳だが、その過程で拠所となったのが論理性と科学的思考であったはずだ。やがてそれは戦後の素朴なヒューマニズムと相まって、やや長じてから噛む唯物史観*とすんなり結びつく事になる。その頃私は東北大経済学部の学生だった。一番暇だから絵が描けるだろう位の気持ちで入っては見たものの、嫌で嫌で学校にさっぱり行かず、アルバイトの映画の看板描きに精出して、結果は倒れて休学、2年も余計にかかってようやく卒業した訳だが、そこでのマルクスとの出会いは私にはかなり決定的なものであり、以降の思考を方向づけたといえる。これで黙劇シリーズの背景がほぼ出揃ったと言えようか。

と言っても、当然のこと今の仕事に至るには様々な紆余曲折の道程がある。かいつまんでそれを辿ってみよう。大学生の頃は、丁度写実から抜けて現代絵画を志向する時期であるが、多分に被害者意識の濃厚な悲し気な人体を描いていた。大学を終わる頃になると、人間の言わばカフカ的変身を意図したり、解体された人体の織りなす社会機構をイメージする様になる。その内に社会風刺の意図をもってたった一年だけだったが、水彩、ペン、コンテなどによる小品を20点程描いたことがある。「変なものが生まれた」「原爆恐怖症」「インテリバカ」「彼の節操」などの題名をつけた。死の灰が騒がれた頃である。少々マルクスを噛って世の中がすっかり見えて来た様な気持ちになっていた頃の事だから、気負って又とない統一感の中で描いていた記憶がある。青い自己統一感、それが妙に懐かしい。

一年で止めてしまったのは、ネタが切れた為でもあるが、その統一感が崩れたからである。世の中は急速に変化していた。その動き、東西世界の様々な様相は、すでに単純なマルキシズム正義感では現代を捕え切れない事を物語っていた。東西の対立そして人工衛星打上げ競争が激しくなる。—— 一体これは何だ、人が集まれば結局やる事は同じじゃないか。なぜ西にも東にも同じ核兵器があり、どうして両方で同じ人工衛星が打ち上げられるのだ。核兵器や人工衛星は将に物質の余剰の産物であり、余剰は詐取によって生ずる筈だ。して見れば西も東もこの大きな体制の違いは名称の違いだけではないか —— こんな自分なりの考えから、青い統一感は崩れていった。

それと同時に、人体は益々解体されかすかに部分の痕跡を止めるフォルムの断片となり、以後12年間私は非具象の範疇に入る仕事をしていたのである。それでも発想の基盤は常に人間にあった様で、人間と物質のかかわり、人間と人間の織成す関係などをテーマとしていた。「百鬼夜行」「いきもの」「ヌケヌケとヌクヌク」「オシツオサレツ」などの題名でそれぞれ連作している。

*唯物史観（ゆいぶつしかん）{マルクス主義の歴史観}

いずれも有機的な曲線を主体とした生命感のある小さなフォルムがからみ合っ
て大きな動勢を作る様な作品であった。それは次第に単純化され大まかになり、
量も色も捨てて白と黒のハードエッジ風のものになって来る。ヌケヌケと
ヌクヌクは男女或いは主従の比喻をもつ発想であり、オシツオサレツは
右と左の押合いの力関係を曲線のフォルムの力関係に置き換えようとして
いる。いずれもユーモラスな形をねらっていた。表現形態は全く非具象だが、
発想には比喻とか象徴とか諷刺の意図が込められていたと言える。

具象的形態を復活させ、それを明確に、解かり易く前面に打ち出したのが
黙劇である。解かる絵、人に伝わる絵を描こうという決意があった。永い
こと非具象をやっていて何だか非常に空しくなったのだ。こんな一般の
人には解かりにくい絵を描いていて、エカキ相互でだけ良いの悪いの
と言っていて良いのだろうか、一人よがりには過ぎないのではないかと
思うようになったからだ。形象の持つ機能を有効に使って自分の思惟
や想念を視覚の中に引出してみようと思った。第一作は玉を操る手品
師の指のダブルイメージを使って赤いカーテンの欺瞞を皮肉ろうとした
作品であった。“手玉にとったのは何者か”とデッサンには題名がついて
いる。黙劇としたのは意図が見えすくのを嫌ったからだ。つけて見ると
なかなか具合がよい。どの絵にも当てはまる。こうして縫いぐるみの様

ひとがた
人形が次々と登場することになる。やがて本当の禿頭にしてしまったが、
前身は指坊主であったのだ。ジット手を見て発想することが多かったの
である。

エア・ブラッシを持ち、この仕事を始めてから 13 年目になる。その間
には発想も表現の意図も、技法も又技法に応じてスタイルも随分変わっ
てきた。現代と人間を捕えたいという目標は変わらないが、私の人間観
も年と共に様々な屈折を経て変わって来ているようだ。初めの頃は告
発、諷刺の意図が強くあったが、近頃は現象そのものより、それ等を
突き抜けて見えてくる人間の本質にせまりたい気持ちが強い。告発、
諷刺すべき問題は 10 年も前に皆やってしまった様な気がする。右傾
化の「予感」、「砂の上の日本」……。今問題は沢山あるが、その質、
問題の成り立ち方は何も変わってないからだ。

ところで、人間とはなんだろう。この恐るべき欲望の固まり、強烈な
権力志向、とてつもない体制を組織し統制し、思うがままに傾けるか
と思えば、小さな家庭をも統御出来ずに破局に向かう。驚くべき明晰
な頭脳、あくなき探究で宇宙を拓き、生命の謎を解明し神の領域に
せまるかと思えば、古来変わらぬいじらしき愛を営み、小さな離別に
打ちひしがれる。二千年、遂に平等を成し得ず、争いを繰り返すおろ
かさ……。笑い飛ばせば悲しくなるし、悲しみ愛でるには又あまりにも
怖い存在。とても描きれるものではない。だから又描くのだろう。

